

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 10 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20760436

研究課題名（和文）古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究

研究課題名（英文）Study on structure and design of the octagonal buddhist tower and hall in the Ancient times and Middle Ages East Asia

研究代表者

箱崎 和久（HAKOZAKI KAZUHISA）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・遺構研究室長

研究者番号：10280611

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：建築史 考古学

1. 研究計画の概要

古代中世東アジアの八角塔と八角堂の構造と意匠について、発掘調査成果や現存遺構をもとに考察し、方形平面の塔との構造的な差異を明らかにすることを目的とする。

（1）古代・中世の八角塔と八角堂に関する発掘調査成果と現存遺構についての諸資料を収集する。現存遺構では本研究に直接関わる木造の塔は中国と日本の計2例しかない。そのため木造の意匠を残す中国の八角磚塔などを含め、それらが木造の構造を表現したものとして理解できるかどうかを吟味する。

（2）中国を中心に現存する八角塔を主として、上記の収集資料をもとに現地調査をおこなう。対象は八角平面の磚塔を多く残す東北地区を軸に、古い遺構を実見できるようにする。

（3）収集資料および実見の成果に基づいて、八角木塔と八角堂の構造システムを分析する。この成果と、すでにおこなってきた方形木塔の構造システムを比較し、構造的な差異について考察する。

2. 研究の進捗状況

（1）発掘遺構に関しては、幸い本研究期間中に韓国の扶余国立文化財研究所から『韓中日古代寺院址比較研究 木塔編』が刊行され、これを翻訳することによって、古代の八角木塔や方形木塔の資料を収集することができた。また所属機関と友好関係にある韓国国立文化財研究所や中国社会科学院考古研究所の研究員との交流の中で、八角堂の遺構についても助言を得ることができたが、数はきわめて少ない。

（2）現地調査については、中国内モンゴル自治区・遼寧省・河南省の八角塔・方形塔についておこなった。これ以前の研究によって中国浙江省・江蘇省・福建省・山西省北部の塔について得た現地調査等の成果から、現存する中国山西省の応県木塔、日本長野県の安楽寺八角三重塔などとの比較が可能になった。

（3）上記の発掘遺構および現存遺構等の収集資料から、発掘遺構の八角木塔について復元的な考察をおこない、少なくとも2つの構造的な形式で説明できるだろうとの見通しを得た。

（4）研究の主眼は八角塔にあり、当初の見通しでは、八角堂も視野に入れる必要があると考えていた。しかし資料を収集すると、八角堂は単純な組物を用いている例が多く、また複雑な組物を用いる日本京都府の三聖寺愛染堂などは、外部に現れる組物はほとんど構造的に意味のないものであることもわかってきた。韓国には木造の八角堂の現存遺構はなく、石造のものも木造の意匠がほとんどなく参考にすべきものがあまりないことが判明した。中国では遼寧省の瀋陽故宮大成殿など数は多くないが、八角堂の遺構があり、上記の八角木塔の組物のシステムで説明できる部分もあることがわかった。したがって、八角木塔の構造システム解明に、八角堂の構造はさほど参考にならない可能性が大きいと考えられる。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

資料の収集については、中国全土の塔について悉皆的調査をおこない、分析の対象に

するのが理想であろうが、これは到底不可能ななかで、既往の研究で得た資料も活用しながら、また韓国で発掘資料が集成された幸運にも恵まれて、研究の大きな課題である八角木塔の構造システムについての見通しを得ることができた。また八角堂については、八角塔を考える上では参考にしにくい可能性が大きいという見通しを得ることができた。以上から本研究の目的のきわめて重要な課題に対しては概ね見通しを得ており、研究は順調に進んでいると判断している。

4. 今後の研究の推進方策

上記のように、八角木塔についての構造システムは概ねつかんだ。不足している収集資料として八角輪蔵があり、これらの資料を収集したうえで、八角木塔の構造システムと対応するかどうかを分析する。そして最終目標である方形平面の塔との構造的な差異を解明する点を重点におこなっていきたい。方形木塔については、現存塔を中心とする先行研究と合わせて、これ以前の研究で巨大な塔の構造システムについては解明しており、八角塔との比較研究をおこないたい。分析の対象は、組物を構成する横架材が内部に引き込まれた際の構造である。これを規定する可能性のある要素は建物規模であり、一方で中国の南北の地域性も視野に入れなければならない。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

箱崎和久「日本からみた韓半島の古代木塔址」『日韓文化財論叢』奈良文化財研究所・韓国国立文化財研究所、2011年
査読無